

『沈黙する教室』

2019年06月03日

『週刊金曜日』の5月17日号に、『僕たちは希望という名の列車に乗った』という映画の監督ラス・クラウメ氏のインタビュー記事が掲載されていた。映画を「国家への反逆者と見なされ、すべてを捨てて亡命した高校生たちの物語」と紹介していた。興味を覚えたので、映画化された原作の『沈黙する教室 1956年東ドイツ — 自由のために国境を超えた高校生たちの真実の物語』を予約注文した。発売の2日後に、送られてきた。著者は、当時高校生で、亡命したディートリッヒ・ガルスカである。権力をはねのけ、自由を求めて飛躍する若者たちの生き方は痛快で、読んでいて、彼らを後押ししたい思いに駆られた。

ヒトラーのナチズムからソビエト軍によって解放されたことは事実であるが、1990年まで、東ドイツはドイツ民主共和国として、ソビエトの社会主義に基づく政治体制下に置かれた。その体制はソビエト賛美が強要され、自由のない社会で、西側からの報道は規制されていた。人々は隠れて西側の報道を喜んで聞いていた。

1956年ハンガリーで、ソビエト支配に抵抗して反革命運動が起こり、ソビエト軍は銃で抑え込んだ。この時、多くのハンガリー人が殺された。11月に、東ドイツの東の端に位置するシュトルコーで、ハンガリーで戦死した反革命運動の自由の戦士たちに敬意を込めて、女生徒5名、男子生徒15名からなる進学高等学校12年生クラスで、授業中、5分間の黙祷を捧げた。「沈黙する教室」とは黙祷による沈黙を意味している。この黙祷を扇動した首謀者は誰かと学校当局から、国民教育省大臣から恫喝的に調べられた。ハンガリーの著名なサッカー選手の死に哀悼の意を表したと言ったが、「西側のイデオロギーに毒された挑発的なガキどもが、社会主義の理想を無作法にも嘲っている」と見なされた。生徒たちは固い連帯感を持って、首謀者の名を上げなかった。事実、誰かが扇動したのではなく、自発的に黙祷をしたのであった。保護者たちは困惑し穏便な処置を求めたが、聞き入れられなかった。硬直化した東ドイツ当局は生徒たち全員に「国家への反逆罪」として退学処分を下すことで、体制の維持を図ったのである。退学は大学進学を断念させられることで、将来への希望が持てないことを意味していた。生徒の一人ディートリッヒ・ガルスカは親戚を頼って西ドイツに逃れて行く。

集団でいても怪しまれない、試合が行われていたサッカー場に、男子生徒は全員、女子生徒二人は家に残ったが、大半が集まり、「西に行くか？ここに残るか」を話し合った。退学させられたので、将来の希望は持てないと、全員が西に行くことと決断した。まだ何も分からない17、8歳の高校生である。厚い壁で分断された東西ドイツを隔てる壁が崩壊することなど思いも及ばない。西ドイツに行けば、家族とはもはや会えない、悲しい別れがある。また、西ドイツに行っても展望が開けるかどうか分かならない。更に、密告する者がいれば、彼らはどうされるか分かならない。悲しみと不安と恐れが渦巻く。しかし、彼らは固い決意と連帯感を持って、東ドイツから脱出する。先に行ったディートリッヒの協力を頼りに、細心の注意を払いながら、二人づれ、あるいは、一人で列車に乗って、西ドイツに向かう。それが『僕たちは希望という名の列車に乗った』である。皆無事に、西ドイツに辿り着く。

西ドイツは生徒たちを暖かく迎え入れた。新聞は下記のように書き立てた。「『ビルト紙』シュトルコーの勇敢なる最上級生たち、クラス一丸！自由のために逃げた！ 『アーベント・ポスト紙』クラスの運命、生徒15人が逃亡。ソ連区域から西ベルリンへ 『ベル

ニナー・モルゲンポスト紙』SED幹部、少年少女を脅迫。15人が選んだのは、自由 『ターゲスシュピーゲル紙』高校生 15人、共に占領地区より逃亡 — ハンガリーへの思いが退学の引き金に」。新聞報道はいささか西ドイツ礼賛みであるが、当時の東西冷戦の厳しさを反映している。高校生たちの勇氣ある決断と強い連帯感に感銘を受けた。東ドイツの教育、社会事情などが分からないため理解し難いこともあるが、高校生たちはこの時既に、自立した大人を感じさせる。西ドイツに着いた生徒たちに対し、教会と牧師たちが大きな支援をしている。

彼らは西ドイツでそれぞれの生き方をして、大人になった。そして、退学になって40年目の1996年に、故郷シュトルコーで同窓会が開かれた。ディートリッヒは下記のようなスピーチをしている。「私たちの当てつけがましい行動はとっさに決められたものであり、計画された抵抗運動や戦略的なものなどありませんでした。しかし、17歳と18歳のクラスがこの連帯の信条を最後まで守り通したことは、もしかしたら、私たちがこの政治体制に実際に対立したという、抵抗を意味するのかもしれませんが。個々の未来がどのような危険にさらされているのか、最後には誰もが知っていたのです。あれは権力のおぼろげな利用に直面して、表面化した行動でした。」黙祷はハンガリーで戦死した人々への若者らしい追悼の意志で、凜とした抵抗意識などはなかったであろう。しかし、それが、図らずも、権力への抵抗を示す行動になったのである。元教師とクラスメイトの女性が40年を経て、老いらくの恋を実らせ結婚したというから、彼らの若さに敬服し、笑ってしまった。

『沈黙する教室』を読んで、二つのことを思った。一つは、ヘルマン・ヴィンデ牧師との出会いである。妻がロンドンに短期の語学研修に行った時、旧東ドイツのケムニッツ出身で、薬剤師のイネス・シュースターさんと知り合い、以来ずっと交流を続けている。彼女は熱心なキリスト者であることが交流を続けることを可能にしているのではないかと思う。彼女を訪ねてドイツに行った時、普通の観光旅行では行けない所にも案内してくれた。彼女の尊敬するヴィンデ牧師を紹介され、親しく話し合う機会を得た。彼は高齢になり、隠退されていたが、旧東ドイツの教会の指導的な立場にあった牧師であった。息苦しい社会主義体制の中で、苦悩した教会のことを話してくださった。当局は、牧師には尾行をつけ、会話を盗聴していた。込み入った話をする時は、車の中でエンジンをふかしたまま、話をしたと言っておられたことが印象深かった。厳しい管理社会の中で、キリスト教信仰を貫き、自由な時代の到来を祈って待ち続け、その時代を招来させたのである。東西ドイツを分断していた壁を打ち砕いた「ビロード革命」を実現させた「ニコライ教会」に行った時、暴力ではなく、平和的に革命を成し遂げた様子を聞き、感銘を受けた。平和と和解を求める教会の祈りと働きが大きな力になった。しかし、当局に密告していた人もいて、統一後、それらの資料が公開され、市民の間で不信感に満ちた辛い経験をし、以前のような関係を持てなくなった悲しい事実もあったそうである。

今一つ思うことは、日本は管理社会化し、旧東ドイツのように自由が奪われていくのではないかという懸念である。発言や行動の自由が奪われることは権力者が国民を縛っていくことで、権力の増大を意味し、生き難くなっていく。国際報道の自由ランキングでは、180ヶ国中、日本は67位である。この順位は年々下がっている状況にある。自由が保障されるところで、民主主義が醸成され、人間の尊厳が守られる。自由を確保するために、自分の言葉と行動を常に表し続けることが大切ではないか。